

日本語母語話者と学習者の会話に 挿入される相づちの実態

郭 末任

1. はじめに

日本語学習者(以下、学習者と示す)が「日本人は曖昧である」、「本音を言わない」などと言うのをよく耳にする。それには様々な要因が考えられるが、接触場面での相づち使用がコミュニケーションに何らかの齟齬を引き起こす原因の1つであるとも考えられる。例えば学習者が「明日一緒に行きましょうか」と誘うと、日本語母語話者(以下、母語話者と示す)は、「そうですね 明日はいそがしくて」と答える。この場合、日本語の「そうですね」は同意の意味ではなく「あなたのお話はよく分かりました」という、相手の発話に対する受け入れの意味がある。しかし、学習者はこの場合の「そうですね」を同意の意思表示であると思い込んだりする。したがって、誘いに対し「そうですね」と同意をしながらも、それとは裏腹に「いそがしくて」と相反する意見を持ち出すのに戸惑いを感じる。そして、相手が「行く」と言ったか、「行かない」と言ったかの判断がつかず、なんと「曖昧な答えなんだろう」と思うであろう。このように相づち使用は学習者がよく悩むコミュニケーション上の問題の1つである。母語話者がどのような意図で相づちを打ったのが学習者には判別できないため、文脈上相反する答えのように理解してしまい、「本音は何だろう」という疑問につながる。長年、語彙や文法を学んできた者が異文化間コミュニケーションを図る際に相づちの意味や意図による誤解が生じてしまうのは、実に惜しいことである。学習者がこのような戸惑いを経験する前に、母語話者はどういう話し方、どういう相づちの打ち方をするのかを知るの大切であろう。

2. 本研究の目的

接触場面で交わされた談話記述により、母語話者が学習者とのコミュニケーションを維持していくためにどのような方略を使うか。なかでも、相づちは

どのように活用されているかを明らかにする。また、母語話者の相づち使用は話し相手によって変化するかしないか、変化するとしたらそれは何に起因しており、変化した結果としての相づちの諸相はどうなっているかを明らかにする。

3. 談話データ及び収集方法

(1)談話の参加者：母語話者8名と韓国人学習者10名
(大学院生、女性)

(2)収集方法

各組のトピックはそれぞれ参加者2人が決めてから話を開始し、20分間自由会話をを行った。この談話をテープとビデオに収録し、談話終了後にフォローアップインタビューを行った。フォローアップインタビューでは、まず相づちの使用または不使用に対し、どのように感じるかについての意識を聞いた。次に、収録したばかりのビデオを参加者2人と調査者が一緒に見ながら、各場面の相づちに対するコメントや感想などを聞く、いわゆる刺激回想法で行った。以上のようにして得られた発話資料を文字化し、分析の対象とした。

4. 相づちの定義

3.1 節の見出し

表現形式が「相づち詞」でありながら、以下の5つの機能を果たしているものを相づちとみなした。

- ①聞いている：聞いているという信号を示すもの
- ②情報の了解：相手が伝えた情報の了解を示すもの
- ③同意の表示：相手の話に同意や共感を示すもの
- ④感情の表出：相手の話に感じた喜び、悲しみ、驚きなどを示すもの
- ⑤間をもたせる：次にどちらかが話し始めるまで余韻のように続けられるもの

5. 分析の結果

5.1 相づちの使用例

(1)母語話者による学習者の発話の受け止め

(例1)

1K: いや ここで知り あいました

→2J: あ そうなんですか あ 今はなに するんですか

3K: 今 ここの 研究生 です

→4J: あ そうなの↑ あんまり お会いしたこと ないですね

5K: ええ そうですね 今は どう

6J: ○○さんと 同じ ここの 2年です いつ 日本に 来たんですか

7K: 昨年の 四月 の前に

→8J: あ そうですね 昨年の 四月

9K: 聞いて下さい 答え ますから

(例1)は談話が始まり自己紹介が終わったばかりの部分である。(例1)をみると、母語話者が質問し学習者に答えさせている。しかし、その答えは母語話者が相づちを打ちながら聞くほど長くない。そのため、「聞き手から送られた」位置に母語話者が相づちを挟むことは物理的に難しく、相づちを打つやいなや自分自身がターンを取らざる得なくなる。このような状況が接触場面での「ターンの冒頭」という位置に相づちが多く用いられるメカニズムの1つであると推察される。つまり、学習者に質問し答えさせ、その答え(1K)に対し、母語話者が2J「あ そうなんですか」と、「ターンの冒頭」で「情報の了解」の相づちを打っている。4J、8Jも同じである。

(2)ミスコミュニケーションの修復

(例2)

1K: 昨日 なんか 神父さんに

→2J: 新婦さんか あ そうかそうか うん 相手ね 新婦さんね

3K: うん あの 説教するでしょう 説教

→4J: うんうん せき

5K: 説教 お説教

→6J: うん あ 神父さん あ やっぱり 神父さんね うんうん

7K: だから 教会で 式を 挙げたんだから

→8J: そうですね え そうなんだ ええ で

も 二人とも あの

接触場面では相手の話の内容がお互いに理解できない状況が生じやすく、そのようなミスコミュニケーションを修復していく過程での相づちが多く用いられた。人間同士のコミュニケーションでは、どのような場面でも誤解は起こりうる。しかし、接触場面では文化の背景や母語での言語運用の仕方が異なる人間同士が接するがゆえに、誤解が常につきまといやすい。(例2)は、誤解が生じそれを修復していく過程で母語話者が用いる相づちである。

(3) 母語話者のフォロー

(例3)

1K: いろいろな事情 いろいろ違うし

→2J: 働いてる人もいるし そうじゃない人もいるし うん そうですね

3K: うん そうなんです 同じ状況で なんか自分を理解してくださいとは

(例3)は、留学生の事情は人によってそれぞれ違うという学習者の話に、母語話者がさらに説明を付け加えた上で2J「うん そうですね」と相づちを打っている。意味上のつながりをみると、2J「うん そうですね」は相手の先行発話(1K)に対する同意だけでなく、2Jで自分が発した話の内容にも同意しているものと解釈できる。このように学習者が何かを話せば、母語話者は話の進行を図るため、学習者が発した話の内容を補充しながらフォローする。

以上、会話例から母語話者が学習者とのコミュニケーションを維持していくための方略として相づちをどのように活用しているのかを、1)学習者が発した発話を母語話者が受け止めること、2)ミスコミュニケーションを修復していく過程で用いられること、3)学習者が発した新情報を母語話者が繰り返したり、補充したり、拡張したりしながらフォローする過程で活用されること、という側面から取り上げた。

5.2 相手の学習歴による変化

母語話者の相づち使用変化をみた場合、変化は話し相手の「学習歴」と密接に関連していた。その変化をグラフで示したのが、図1である。図1では、談話資料1から10までの順に日本語の学習歴が長

くなっていく。談話資料1と2と3での学習者の学習歴は3年以下であり、3年以下の学習者に対し母語話者が用いる「ターンの冒頭」の頻度が高くなっている(機能も「情報の了解」に64%も集中している)。分析したデータが少ないこと、談話には様々な要素が入り込んでいることを考慮すると、まだ厳密ではないが、学習者の学習歴が短いほど「ターンの冒頭」頻度が高くなり、このような現象は接触場面での特徴とも言えよう。

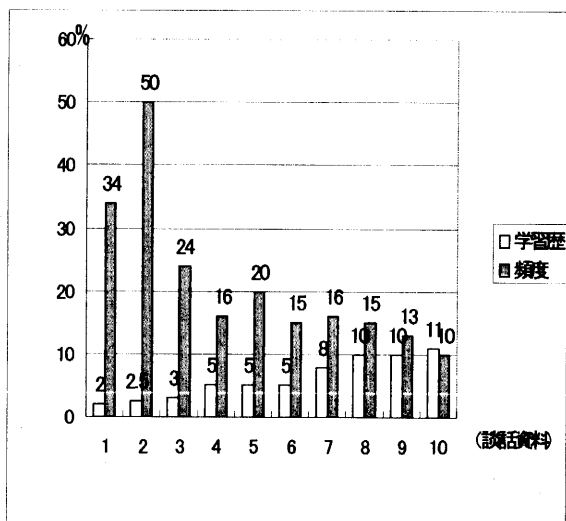


図1 学習歴と「ターンの冒頭」の頻度

*頻度の実数は母語話者の「ターンの冒頭」の相づちの百分率(%), 学習歴の実数は「年」を示したものである。

6. おわりに

接触場面では母語話者が新情報を提供するよりも、学習者が提供した情報を受け止め、繰り返したり、補充したり、拡張したりするなどの学習者の発話をフォローしながらそこで相づちを活用するのが多くみられた。今回の談話でも10組中8組が進行役を母語話者が担い談話をリードしていた。コミュニケーションに臨む人の心理状況や対処の姿勢は、談話で自分がどのような立場に立っているかによって変化する。談話の進行役を務めるという自覚を持つ母語話者は、コミュニケーションを円滑に進めていくために様々な方略を用いる。そうした方略の1つがフォローでありフォローのため相づちを活用するのがみられた。

しかし、母語話者が相づちを様々な位置で用いながらも、その相づちがどんな意図で打たれたかを学習者が察することができるかどうかの問題となる。母語話者の相づちを学習者が理解できて、はじめて円滑なコミュニケーションが成り立つ。このような相互の歩み寄りの観点から考えると、相手の学習歴が短いほど相づちを多く用いるのはどうであろう。

母語話者の意図とは裏腹に、学習者にとってはかえて負担になることも考えられる。学習者がこのような相づちをどこまで察することができるかについては、今後の課題としたい。

参考文献

村田晶子(2000)「学習者の相づちの機能分析—「聞いている」という信号、感情・態度の表示、そして turn-taking に至るまで—」『世界の日本語教育』10号 pp241-260

かく まるいん/お茶の水女子大学
malim222@hanmail.net